

うえだ・さちこ ● 東京学芸大学中学校教員養成課程国語科卒業後、不動産ディベロッパーを経て専業主婦に。出産を機に教育の重要性を改めて痛感し、2011年度より埼玉県立高校国語科教師。JICA 教師海外研修参加経験も活かしSDGsを取り入れた授業実践が話題に。2020年度川越初雁高校に赴任。同年一般社団法人ハッシュダイソール理事就任。2023年度より現職。三女の母。



上田祥子さん

埼玉県教育局 県立学校部 高校教育指導課  
産業教育・キャリア教育担当指導主事

古屋星斗さん

リクルートワークス研究所  
主任研究員



## Part 2

対談

— Dialogue

### 学校現場にあふれる 生徒の未来を切り拓く機会

引き続き古屋星斗さんに登場いただき、埼玉県教育局の上田祥子さんを交え、機会が果たす役割について語り合っていました。

——上田さんは、さまざまな機会と選択を経て(次ページ参照)、埼玉県教育局で産業教育・キャリア教育担当の指導主事をされています。加えて、全国の高校・少年院・児童養護施設などでキャリア教育を行う社団法人の理事もされています。古屋さんとは、その団体を通じての知り合いでしょうか。

**上田** 古屋さんが代表を務める別の団体と2019年にイベントを実施して以来のお付き合いです。古屋さんは気鋭の研究者でありながら、高卒就職・非大卒人材という見過ごされがちなところに光を当ててくださる稀有な人。若年者へのキャリア教育の推進を応援してくれています。

**古屋** 上田さんは生徒を第一に考える先生ですが、だからこそ教室にとどまらず、外部の力をどう借りるか、行政の仕組みをどう活用するかなど

広い視野から行動している人です。大きなことを言わせてもらうなら、すべての人が輝ける社会を創ろうと考えている同志だと思っています。

——立場は違っても、同じ方向を見ている人って惹かれあいますよね。

**古屋** 確かに上田さんのネットワークと私のそれが重なることは少なくありません。ただ、知り合いの知り合いが自分の知り合いだったとき、よく「世界は狭いね」と口にしますが、そんなとき「それって勘違いかも。単に自分の世界が狭いだけでは？」と自問するようになっています。知らない世界はたくさんあるのに、そこで接する機会がないだけかもしれませんから。

**上田** 確かに類は友を呼びますが、閉じた関係だけに終始するとエコーチェンバー(※)に陥りかねませんよね。

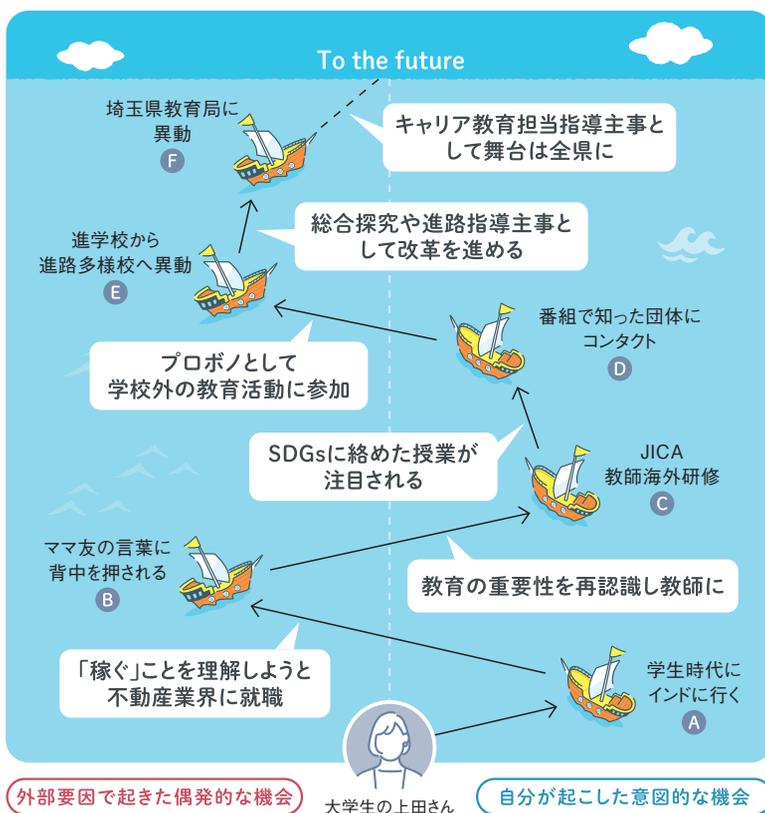
**古屋** まさにそう。なので私は信頼す

## 上田さんの機会と選択

**A** 教員一家に育ち教職を目指すも大学時代に訪れたインドで人々のパワーに圧倒され人生経験不足を痛感。「このままでは説得力のある教師になれない」と思い、まずはお金を稼ぐことを理解しようと不動産関係の企業に就職。

**B** 結婚を機に退職。専業主婦として子育てするなか改めて教育の重要性を実感。ある日ママ友から言われた「教師って尊い仕事だと思う」という言葉に押され県立高校教師に。保育園の送迎を手伝ってくれたご近所さんに感謝。

**C** 教師が挑戦する姿を生徒に見せたいという思いでJICAの教師海外研修に参加。発展する外国の姿から日本の未来に危機感を抱き、SDGsと関連つけたプレゼンの授業を実施。授業実践報告書を通じてネットワークが広がる。



**D** たまたま視聴したNHK『クローズアップ現代』で、非大卒の若者に教育とインターンの機会を提供する団体を知る。自分がしたいのはコレと思い、「国語の授業をさせてほしい」とコンタクト。現在、その社団法人の理事を兼任。

**E** 同僚が行っていた異学年のグループ学習に感激し、翌年、総合探究の責任者として全校に展開。また求人票の整理に追われる現場に愕然としSNSで発信。進路指導主事として、求人情報をDX化するサービスを民間企業と開発。

**F** 教師13年目に埼玉県教育局に異動。産業教育・キャリア教育担当指導主事となった翌年「生徒と教師が主語のキャリア探究へ」を掲げ、「お仕事図鑑pitchトーク」「オンラインキャリア探究セミナー」(※)などの施策を全県で実施。

意見が違う人たちが集う箱。そんな学校の価値を再認識した



る大先輩に時おり「僕が今、やるべきことってなんでしょ？」「この瞬間、僕が会うべき人はいますか？」とアドバイスを求めるようにしています。

**上田** 私も、普段は赴かない居心地の悪いような場所にもあえて足を向けるように心掛けていますし、生徒にもコンフォートゾーンを抜け出すよう促しています。探究のテーマを見つけられない生徒にはよく「本屋さんに通ってみれば」とも言います。書店に行くと、ネットでAIが薦めてくる情報とは違う、何かしら偶発的な気づきや出会いがあるじゃないですか。

——ただ、外向き志向の子は別として、普通の生徒がアンコンフォートゾーンに踏み出すって難しくないですか？

**上田** だからこそ自分だけでは出会えないものと出会えるインフラに、そして新しい出会いをデザインする場に学校がなれたら素敵だなと思います。

**古屋** おっしゃる通りで日本の先生の最大の専門性の一つにファシリテーション

力があると考えています。知識の伝達自体は、AI時代、学校でなくても代替できる余地はありますが、生徒の個性やバックグラウンドを熟知したうえで、それぞれにあった学びや体験をデザインできる専門家はそうはいません。

**上田** 私も教師は媒介者であるべきだと考えています。世の中には教科書以外にも素晴らしい教材がたくさんあります。それらを、的確なタイミングで投げかけ、時に学校外の人をつなげながら生徒の可能性を広げていく。ただ、教師は仕事量が多いのも事実で、誰かしらの何かしらの我慢の上に成り立っている現状があるんです。

**古屋** 先生ならではの責任感や真面目さを時にはリセットし、無理なものは無理と言える力や、援助希求できる力が教師のスキルセットに加わると思いますよね。キャリア自律という言葉がありますが、プロになればなるほど個人でがんばる必要などなく、他人に頼っていいんです。キャリア教育の一次

「共感」と「違和感」。  
二つが揃って学びは広がる



的な目標として頼れる存在を見つけることも大切だと思います。

——外部だけではなく、学校内のリソースを「機会」として有効活用することに關してはどうでしょうか？

**古屋** 自分がいる場所とは社会的文化的に違う環境に身を置くことで学ぶ越境学習(20ページ)という概念があります。「違い」は組織の外側だけにあってはなく、日常空間にも存在します。青山学院大学の香川秀太教授はそれを「日常の越境場」と呼んでおり、学校内部に潜む自分の外側の世界を顕在化できれば、キャリアを考える豊かな機会になると感じます。

**上田** 私は国語や探究の授業で「pitchトーク」というグループ学習を行っていました。ピッチとは短時間で相手の心を動かすスピーチのこと。まずグループ内で90秒ずつ、あるテーマでスピーチしてもらいます。その後グループの代表を決め、全体で発表する。例えば「どんな社会課題に義憤を感じる

か」というテーマであれば40人分の社会課題に触れることができ、「あいつ、こんなこと思っていたんだ」とか「自分は人と違うことを感じるらしい」と気づき、自己認識が深まります。学校とは、意見が違う人たちが集う箱のようなもの。他者と交わることで生じる学びの価値を再認識できました。

**古屋** 素晴らしい取組ですね。「違いからしか学べない」と言った先人がいますが、私は学びのキーワードとして「共感と違和感」を挙げています。共感がないと「自分には関係ないこと」と流しがちですが、違和感がなければ、「わかるー」で終わってしまう。そう考えたとき、学校はその両方を装着した場所ではないかと思えます。高校のクラスで似た属性の人間が集まるため、共感が生まれやすい。一方で上田さんが授業で可視化しているように、実は生徒一人ひとり違う考えを有しているため、違和感が生じることもある。学びが生まれる可能性が高い空間だと改めて感じました。

**上田** 学校は授業が命。主体的・対話的で深い学びが実現できれば、特別なイベントをせずとも意義のあるキャリア教育は実現できると思っています。「他者」と出会う機会であれば、クラスメイトとの対話もそうですが、教科書や教材自体にも出会いはあると感じています。以前、国語の授業で辞書を使用していたのですが、3年間、真つさらな辞書のままという生徒が大勢いました。どうにかしたいと考えた結果、「この子たちにとって調べるツールとしての辞書は不要でも、言葉と出会うツールにはなるのでは」と思いたち、辞書の中から気になる言葉を選んでもらうワードハントという取組をしていました。

**古屋** ページをめくると、これまで知らなかった言葉との出会いがあるわけですから、まさに偶発性ですね。

**上田** そうなんです。そして素敵だと思えた言葉を皆でシェアしたことで、オリジナルの「素敵な言葉の辞書」が完成しました。結果、語彙力や表現力を高められましたし、言葉を調べるためのツールという、辞書本来の使われ方をされるようになったんです。さらに、自分が素敵と感じた言葉の共通項から、自身の興味関心に気づき、進路選択へとつなげていった生徒もいたり、逆に生徒が素敵と感じた言葉

の共通項から、教師である私がその生徒の特性に気づき、キャリア支援の際の参考になったり、といったことも。教科教育の中のキャリア教育的側面を感じた経験でもあります。

——ありがとうございます。最後に教師のあり方についてお聞かせください。

**古屋** 失敗や悩みも含め、生の言葉を伝える機会をつくってほしいです。高校生のロールモデルになり得るのは、自ら新しいことに挑戦し続けている先生ではないでしょうか。試行錯誤しながら自身のキャリアを豊かにしているこうと行動している姿が、卒業後、多くの機会と選択を重ねていく必要がある高校生に勇気を与えるでしょう。

**上田** 私も自分に向き合った結果として出てくる言葉を教師自身がアウトプットすることが大切だと思います。外に発信すれば、それを受け止めてくれる人も大勢生まれます。教師同士、学校同士がつながり、実践を共有し合うことができれば、そして「自分でなんとかしなきゃ」という「我慢」を手放し、社会に対して「助けて」と言えるようになれば、学校の力は何倍にもなるのではないのでしょうか。教師つて子どもたちの未来を創る仕事に人生を懸ける選択をした人たちです。これほどパワフルでイノベティブな集団はいないと思っています。